

神戸昇天教会月報

☎652-0015 神戸市兵庫区下祇園町39番7号 神戸昇天教会

牧師 小南 晃 電話 (078) 361-4490
FAX (078) 361-4539
http://nssk-kobeshoten.org/ 口座振替 01110-2-10517

今年の標語

「来てみませんか」と誘える教会を目指そう。

努力目標

- 礼拝出席に努めよう。
- み言葉を分かち合おう。
- 地域との交流促進。

聖語

いつも喜んでいなさい。
絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい。

(1テサロニケ5:16-18)

人々の困窮を前にして

イエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。(マルコ6:37)

司祭 ミカエル 小南 晃

冒頭の聖句は、マルコによる福音書6章30節以下の「5千人に食べ物を与える」と小見出しのついた箇所の1節です。これはイエスのもとに集まってきた5千人の大群衆を、イエスがたった5つのパンと2匹の魚で養われたという奇跡の話です。

その聖書箇所を見ますと、イエスはこの大群衆を「飼い主のいない羊のような有様」として深く憐れまれたとあります。それは彼らが良き指導者に恵まれず、抑圧や搾取などで疲弊ききっていたということでしょう。この憐れむという言葉は、もとのギリシア語では「はらわたが痛む」といった意味であり、群衆のそうした窮状をまさに断腸の思いで憐れまれたということです。

弟子たちにしても彼らの苦しみは知っていたかも知れません。しかし助けを求め、すぎるような眼差しを向ける彼らを、きっと受け止められなかったのでしょう。弟子たちはイエスに「人々を解散させてください…そうすれば何か食べる物を買に行くでしょう」と願います。むしろ弟子たちの方が彼らの前から逃げたかったのかもしれない。

そうした弟子たちの心理を知ってか知らずか、イエスは「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と答えられました。それに対する弟子たちの言葉、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」には、言外に「とても無理です!」という彼らの心の叫びが聞こえます。

しかしこの後に分かれ道が出てきます。「無理です!」と言ってそのまま心を閉ざすのか。

それとも無理と思いつつも、イエスの群衆に対する憐みに目をむけるのか。

イエスは「パンは幾つあるのか、見てきなさい」と弟子たちに命じました。そして弟子たちは探して「5つあります。それに魚が2匹です」とイエスにありのままに報告します。

5千人に食べさせるためパンを探しに行き、5つしか見つからない時、これは明らかに焼け石に水です。その時に「5つあります」と答えるか、それとも「ありませんでした」と言うのかです。私たちはこの状況では、往々にして「ありませんでした」と答えてははいないでしょうか。

この聖書箇所を見る時、私には思い出すことがあります。今から23年前の阪神淡路大震災です。近くの小学校など多くの避難生活者が集まっている状況を見て、こういう時こそ教会として何かをするべきなのではという思いが、一瞬、よぎりました。しかし即座に「とても無理!」という考えがその思いを打ち消しました。

しかしこの時、近隣の人々を教会に避難させ、手持ちの僅かなお菓子などを分け与える一歩を踏み出した或る教会は、やがて地域の救援センターのようになって行きました。私はそれを見て、このことを教訓として、今度、同じような状況になったら「無理です!」ではなく、小さな一歩を踏み出すものでありたいと思っていました。

しかし今度の西日本豪雨に際して、神戸教区として何かすべきではとの言葉を聞いた時、出てきた考えは「これは神戸教区の力に余る。とても無理!」でした。

自分の中にある、こうした傾向はもはや変わらないのかも知れません。しかしそれでも良いのではと思いついています。何故なら弟子たちでさえ、とても無理と思つた筈だからです。

大切なのはその後ではないのか? 無理と言って、そのまま耳を塞ぐのではなく、無理とは思いつつも、主イエスはこの時に何をなさろうとしているのかを問いながら、小さな一歩を踏み出す者となれたらと願うものです。

定例集会

日 午前7時 早朝聖餐式
" 9時15分 教会学校
" 10時30分 聖餐式・説教
午後5時 夕の礼拝

水 午前10時30分 聖書研究会
土 午前10時30分 教会掃除
(ご奉仕をお願いします)